

税金を使うということ

お茶の水女子大学附属中学校 3年 菊地奏

「ただいま。」

母が帰って来た。予想していたとおり疲れ切って顔色も悪い。早く座って欲しくて、私は急いで冷たいお茶を持って来た。

母は自治体に勤める公務員だが、現在は保健所が仕事だ。コロナ禍の今、保健所は緊張感と多忙を極めていると聞いている。何とかしてコロナの感染を収束させて欲しいというのは全ての人の願いだ。そのために人々はいろいろな声を保健所にも届けてくる。行政に携わる自治体側としても人々の切実な想いを何とかいい形で結果にしてゆきたいと苦労の日々が続いているのだ。

行政の仕事の財源は税金だ。そもそも納税は国民の義務であり、寄付のように本人の自由意志で納めたお金ではない。どんなに生活が苦しくても収入基準を超えれば必ず定められた額の税金を納めなければならない。だから人々は必然的に「税金を取られた」という意識を持っても仕方がない。例えば、母の勤務する自治体では、ある特定の業種でコロナ陽性者が増えていることが分かり、この業種の従業員全員にPCR検査を受けてもらい、陽性者が出た店舗に休業要請する。要請に応じてくれた店舗へは休業助成金を支払うという施策を打ち出したそうだ。これに対して住民からは「そうだ、よくやった」という賛成意見もあれば「特定の業種だけ助成するのは不公平ではないか」「我々の税金でこの業種だけ助成するのは納得いかない」等、批判的な声も数多くあったという。税は自分が納めたお金なんだから自分の納得できないことに使われたくないと、住民の目が厳しくなるのも当然だろう。「税金を使って仕事をするって軽いことではないんだよ。」とは以前から母の言っていることだが、この頃加えて言うことは「より多くの人達から『やってもらってよかった』と思ってもらえる成果を出さなきゃだめなんだよ」ということだ。

より多くの人々の納得を目指し、様々な立場の意見を聞き、状況をよく見定めながら、人々から託された税金を使って仕事をしていく。それが行政で働く人の矜持であり使命なのだと話す母の側に座りながら、私も身の引き締まる思いがした。

お金を使うことの緊張感、慎重さ、実は私自身、あまり気にしてこなかったと思う。決められたお小遣いは減らしたくはないけれどまあ、足りなくなったらきっと何とかなるだろうぐらいに考えていたと思う。でもこのお小遣いそのものも「有効に意味ある使い方をして欲しい」という願いを込めて、両親が私に託した税とも言える。受け取る私はそこに親の愛情や願いが込められている事を自覚し、意味ある使い方をしなくてはならない。むろん、お金だけの事ではない。願いを込めて与えてもらったものを尊重し活かすこと。それが受け手としての私の義務なのだと思う。